

「私とジェンダー」をテーマに  
毎回様々な切り口でコラムを  
掲載しています。

# ジェンダーと私

『赤毛のアン』と『次郎物語』とジェンダー

ふじた・ひろみ

府立高校教諭。1997年から女性のための  
支え合いと話し合いのグループ、グ  
ループIを主催。フェミニスト・カウ  
セリング学会会員、臨床心理士。

藤田 ひろみ

## 思春期のころ10

「赤毛のアン」のシリーズは全10巻ある。私はそれを6巻まで読み終えたが、その後が続かなかった。全10巻を読破できなかったことを、なんとなく自分の落ち度のように、がんばりが足りないように感じていた時期が長かったことを思い出す。私には何事もできない自分を責める傾向があった。それでも、読めなかった。

図書館で借りた村岡花子訳のシリーズは、細い線で繊細に描かれた挿し絵があった。ほっそりした細おもての少女は、私の心の中で生き生きと瞳を輝かせ、失敗しながらも主体的に、常に自分に誇りを持って活動していた。そしてさまざまな局面を経て、幼なじみで人生最大のライバルであった男性と結ばれる(6巻)。そしてその後の物語は、急速に色褪せ、私の興味を失わせた。

同じく村岡花子訳で読んだ「足長おじさん」も「少女パレアナ」も、結末は幸せな結婚だった。「シンデレラ」や「白雪姫」だけではない、主体的に活動し魅力にあふれる少女たちの物語もまた、幸せな結婚によって終焉となる。

多感な思春期のころに、私は少女

たちの物語以外に他にも幅広く読書をしていった。文学だけでなく自然科学やノンフィクション、伝記を読むのも好きだった。その中で、私の気持ち大いに鼓舞したものに「次郎物語」がある。私が最も好んだのはその第三部だった。次郎が旧制中学に入学し、恩師と出会い勉学に目覚め、自分の将来を展望する姿に素直に共感した。福沢諭吉の伝記を読んでも、慶應義塾に集う青年たちが建国の夢を抱き、切磋琢磨しながら仲間と伴に学ぶ姿にあこがれを感じた。学ぶということが自分の将来を作ることであり、その結果国造りに参加していけるといいたいような展望に、中学生の私がわくわく感を持ったのも、また確かなことだった。

## 幸せモデルとジェンダー

「赤毛のアン」に描かれるような幸せな結婚と「次郎物語」に示されるような学びと自己実現は、ジェンダー社会において、前者が女性の幸せモデル、後者が男性のそれに当たる。私はその両方を自己に内包し、それが一人の人間の中では矛盾であることに気づかなかった。だから私

には、樋口一葉が、なぜ半井桃水との恋愛を捨て、貧乏をしながらも自活にこだわり、原稿料のために文筆を志した理由が理解できなかった。夫からの純愛を受けた高村智恵子の生涯ほど幸せなものはないと、自分に思い込ませていた。彼女たちの生涯こそが、ジェンダーの軋轢の中で自分らしく生き抜こうとして倒れた姿であることを知るまでには、私には長い年月が必要だった。

今思うと、アンの夫、ギルバートは、アンのために造作された男あり、全く魅力に乏しい。ところがあのよう  
に、全面的に自分を愛し崇拜してくる男が自分のパートナーになる、という幻想に少女たちは陥れられ、不幸な生涯をたどる。私も例外ではなかった。

しかし、男たちもまた、女に対して幻想を抱いていると言えるだろう。ポルノが描くような、男の性奴隷となつて満足する女ではないとしても、ジェンダーが定義する、たとえば、家事ができて控え目で、よく気がつく妻を得ることを、今でも多くの男たちは望んでいるのだろうか？  
少なくとも、私の最初の夫は、そうであったと思う。

互いに現実の相手ではなく、幻想